

『新真婦人』における女性像

武田 未来

本研究は、『新真婦人』の詳細な分析を通して、同誌によって伝えられた女性像を明らかにすることを研究目的とした。明治から大正にかけて、数々の女性誌が誕生してきた。日本最初の女性誌『女學新誌』は、男性によって作り出されており、その目的は女性のための雑誌というよりも、「女学思想」を世に広めることが目的であった。明治初期には、このような啓蒙誌的な特徴の強い女性誌が多かったが、明治 20 年代から 30 年代にかけては多様化してきた。女性はいかに生きるべきかという観念的な生き方に重きをおく文芸誌系、宗教誌系、思想・評論誌系、修養誌系の雑誌と、具体的な生活を重視する家庭誌系、専門誌系、PR 誌系の雑誌とに大きく二分されるようになった。本研究が対象とする『新真婦人』は観念的な女性の生き方を主要なテーマとしており、主義主張が誌面に強く出ていることが特徴とされる思想・評論誌系の雑誌に分類される。

『新真婦人』は 1913（大正 2）年 5 月に新真婦人会によって創刊された女性誌である。新真婦人会は、1913 年 2 月下旬に西川文子（1882－1960）、宮崎光子（1885－1916）、木村駒子（1887－1980）の 3 人が発起人となり創立された。創刊目的は、創刊号巻頭の「宣言」によると、女性たちが心の奥底にある潜在能力を発揮することが「新しい眞の婦人の生活」であり、このような生活の実現に向けて努力すること、他の女性たちへもそれを広めていくこととなっている。先行研究は、おもに西川文子らの著書や人物を対象としており、雑誌については自由恋愛・自由結婚に基づいた対等な男女の関係論・家庭論を扱ったとされるが、雑誌自体を詳細に分析した研究はみられないため、本研究では、『新真婦人』を対象とした分析により、雑誌としての性格を明らかにするとともに、そこで理想とされていた女性像を明らかにすることを目的とした。

具体的には、同誌の価格やページ数の経年変化、掲載された広告や記事の種類に関する数量的な分析によって、雑誌の性格を明らかにした上で、掲載された記事内容の分析をおこなった。その結果、『新真婦人』は同時代の『青鞥』に比べて低価格であり、個人向けより家庭向けの広告の掲載が多いことなどから、女学生でなく婦人を読者対象としていたと考えられる。また、掲載された記事の種類については文芸的な記事よりも「論評」や「解説」のような記事が多く、女性の人生や生活に関係したものが多かった。とりわけ、「論評」では夫婦や家庭のことを論じた記事が多く、夫婦は友愛に基づく互恵的な関係を築きあげることが大切だとする言説が目立っていたが、女性の社会進出を扱った記事もあった。

『新真婦人』が提唱する理想の女性像については、女性が男性に劣っているという考えを女性自身が捨て、自分の価値を自覚することで、家庭や社会において男性と相互に協力する関係を築ける女性であったことが、本研究では明らかになった。

（指導教員 原 淳之）